

RS ウイルス感染症について

新潟県福祉保健部健康対策課

1 流行状況

- 令和元年第 36 週（9 月 2 日～9 月 8 日）の定点当たり報告数は全県で 5.91 と、前週の 3.77 に比べ増加しました。
- 例年秋から冬にかけて主に乳幼児の間で流行していましたが、近年では 7 月頃より報告数の増加が見られるようになりました。例年よりも高い水準で推移しており、社会福祉施設における集団発生の報告もあることから、十分な注意が必要です。下記 3 を参考に、予防を心がけましょう。

2 RS ウイルス感染症とは

- RS ウイルス感染症は、RS ウイルスを原因とする呼吸器系の感染症です。患者の約 75%以上が 0 歳児と 1 歳児で占められています。
- 潜伏期間は 4～6 日です。症状としては、軽い風邪様の症状から重い肺炎まで様々です。低出生体重児、心疾患、肺疾患、免疫不全のある方は重症化のリスクが高いといわれています。
- 初めて感染した場合は症状が重くなりやすいといわれており、終生免疫は獲得されないため、どの年齢でも再感染は起こりますが、一般的には年長児以降では重症化はしません。
- 乳幼児期、特に 1 才以下で RS ウイルスに初感染した場合は、細気管支炎、肺炎といった重篤な症状を引き起こすことがあります。

3 予防方法

- 患者の咳やくしゃみなどのしぶきに含まれるウイルスを吸い込むことによる「飛沫感染」や、ウイルスが付着した手で口や鼻に触れることによる「接触感染」といった経路で感染します。
- 予防接種はありません。
- 本疾患の発症の中心は 0 歳児と 1 歳児です。一方、再感染以降では感冒様症状又は気管支炎症状のみであることが多いことから、RS ウイルス感染症であるとは気付かれてない年長児や成人が存在しています。従って、咳等の呼吸器症状を認める年長児や成人は、可能な限り 0 歳児と 1 歳児との接触を避けることが乳幼児の発症予防に繋がります。
- また、0 歳児と 1 歳児に日常的に接する人は、RS ウイルス感染症の流行時期はもちろんのこと、流行時期でなくても、咳などの呼吸器症状がある場合は飛沫感染対策としてマスクを着用して 0 歳児、1 歳児に接することが大切です。
- 接触感染対策としては、子どもたちが日常的に触れるおもちゃ、手すりなどはこまめにアルコールや塩素系の消毒剤等で消毒し、流水・石鹸による手洗いか又はアルコール製剤による手指衛生の励行を行います。
- ★ 早産児や慢性呼吸器疾患を有するハイリスクな乳幼児には、RS ウイルス感染による重篤な下気道疾患の発症を抑制するためにパリビズマブ（抗 RS ウイルスヒト化モノクローナル抗体）という薬を使用する場合があります。使用については医師の判断になります。

4 学校保健安全法における扱い

- 学校保健安全法には明確に規定されていません。
- 登校登園については、医師の指示に従ってください。